慈光

第九卷　第三號

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和三十二年三月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第九十六号）

目次

同座の聖人……花田正夫…(1)
易往而無人……福島政雄…(4)
耳と目……榊原徳草…(8)
奄美群島の開教……長峯崇仁…(12)

同座の聖人

花田正夫

戦災で「一心正念直来」の池山先生の御軸を焼失した私に、奈良の浄教寺の島田義昭さんから

「久遠このかた子故の廻向、わたしひとりをかた思ひ」

の池山先生の御軸を頂き、先生が恋ひしくなると掲げては心を慰めて居りました。

ところが一道庵を結びました頃、岡山市の山陽女子高等学校の堀尾先生から、岡山に先生の御名号が五幅ある。その一つを草庵にとどけますと約束をされ、待つて居ります と墨痕鮮やかな御名号をお伴して下さいました。ところがその堀尾先生は胆石病のため急逝せられ、その御病中に、堀尾先生自身の御名号が表具屋で焼失したので、それを非常に悲しんで居られました。

ところが頂いた御名号を私自身また失ひましたので、諸行無常とは申しながら、もの淋しく思つて居りましたところ、今度京都の福本慶子さんが、池山先生の

『親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじ心にてありけり』

と勇渾な筆勢で書かれた大幅の御軸をお伴して来て下さり、爾来草庵に掲げて毎日仰いで居ります。先生の御名号を無くした私に同座して、同悲同融して下さり、心の隅々まで温め満たして下さるのであります。

ここ半月ばかりこの御軸の前に終日送り迎へしました私の胸に『同座の聖人』の徳光をしみじみと渇仰申し、何かその心持を誌したいと思ひます。

『親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじ心にて…』

と仰せ出られる聖人は、御承知の通り、歎異抄九条の金言であります。かつて、聖人の御導きを蒙つて、称名念仏の人となつた唯円房が、一年二年と経つにつれて、所謂タドンの火が消えたのではないけれど、外側が白い灰に包まれ

る如くに、信仰のほとぼりが浮世の冷い風にさまされて、よろこびの心のおろそかになつた時、そのありの儘を聖人に申上げたのであります。それは微塵も如何ともすることの出来ぬ自分の業報のきびしい姿であります。

この時、聖人が若しそれでは駄目だと叱り退けられたとするなれば、唯円房は、たとへその後聖人に常随忸近出来たとしても、往生の望みは絶たれたも同様であります。ほんたうに重病人が名医の最後の診断をうける心地こそ唯円房のこの時の心中でありました。

ところが聖人の仰せは、お前もさうか、親鸞も同じ心であるぞ、と、悠揚せまらず仰せられる。これを承る唯円房の心はどうでありませうか。こんなことではと歎きながら、それが如何にしても除くことの出来ぬ病患者に、親鸞も同じ心よと同座して下さる。

全く呆れはてる外はない。呆然として聖人の慈顔を仰ぐ。すると、それに呼応せられて

『よく〳〵案じみれば、天におどり地におどるほどに、よろこぶべきことを、よろこばぬにて、いよ〳〵往生は一定と思ひたまふべきなり』

と仰せられる。喜ばないでもよいどころではない、喜ばぬにていよ〳〵往生は一定と仰せられる。驚天動地とはこのことであらう。相対五分五分の世界では聞くことの出来ぬ声である。私はひそかに想ふのでありますが、親鸞聖人が、聖徳太子と法然上人とを、観音、勢至の化現と仰がれるのも、太子と上人の御勧めの中に、相対五分五分の人生では仰ぐことの出来ぬ光明を聞きとられたからでありませう。然し私共も亦、聖人のこの御言葉を通して、唯円房と共にそこに浄土化現の大菩薩の徳音を聞くのであります。恩を受けながら、喜べない者、さうした者は、誰からも呆れられ、捨てられて行くのがその定めであります。

それなのに「よろこばぬにていよ〳〵往生は一定」と仰せられる。世間稀有の徳音であります。絶対不二の妙法であります。

なほ充分に得心の行かぬ唯円房に、聖人は更に語を次いで下さる。

『よろこぶべきこころをおさへてよろこばざるは煩悩の所為なり。』

と、喜べぬ心の原因を指摘して下さり、

『然るに仏かねてしろし召して、煩悩具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくの如きの我等がためなりけりとしられて、いよ〳〵たのもしく覚ゆるなり』

と結ばれる。

『仏かねてしろし召して、煩悩具足の凡夫と仰せられたることなれば』

とあるのを、更に、第三条と結び合せば

『仏かねてしろしめして、煩悩具足の凡夫、いづれの行にても生死をはなるることあるべからずと、仰せられたることなれば』

となります。そして

『他力の悲願は、煩悩具足の凡夫、いづれの行にても、生死をはなるることあるべからざる、斯くの如きの、われ等がためなりけりとしられて、いよ〳〵たのもしく覚ゆるなり』

と結んで下さるのであります。ここで注意させられますことは、『かくの如きの我等』と仰せられる、自分の姿といふものは、自分が自分をあゝ思ふ、かう思ふといふやうなものではなしに、『仏かねてしろしめし』て下さる我等の真相であります。

世間によく『我々は凡夫だから』といつて自分の浅間しさを弁護し、煩悩の肯定をする、自己弁解する声をききます。私自身が油断もすきもならない人間で、よく気をつけねばならないのでありますが、さうではありません。元来『凡夫である』との自覚は、菩薩の第八位、不動地に入つて、『自分は一介の凡夫であつた』と自覚されて、所謂『衆流に冥合して更に異趣なし』で、他と融けあふ道がひらけるのであります。

さうでありますから、狂人が狂者の自覚があり得ぬ如く、真正の凡夫に、凡夫といふ自覚が出来ようはづがないのであります。唯言ひ得ますことは『仏かねてしろしめして、煩悩具足の凡夫』と仰せられる、仏の御智慧をもつて我等の真相を御照覧下さつて、さう仰言つて下さる。それを聞信することだけであります。

御和讃に『煩悩具足と信知して、本願力に乗ずれば』とあります、仏語を信知させて頂く、そこが大切であります。

御本典の至心釈にも

『仏意はかり難し、しかりといへども、ひそかにこの心を推するに、一切群生海、無始よりこのかた、乃至今日今時にいたるまで、穢悪汚染にして清浄の心なく、虚仮諂偽にして真実の心なし。是を以て、如来、一切苦悩の衆生海を悲憫して、不可思議兆載永劫に於て、菩薩の行を行じたまひし時、三業の所修、一念一刹那も清浄ならざるなく、真心ならざる無し。……』

とあり。これが『仏かねてしろし召して、煩悩具足の凡夫』と仰言るところであり。同時に『他力の悲願はかくの如きの我等がためなりけりとしられていよ〳〵たのもしく覚ゆる』ところであります。

『是を以て如来…』とありますところが、如来至心のおこりであり、そのままが『他力の悲願は、かくの如きの我等がため』としらされるところであります。

易往而無人（三）

福島政雄

とに角、親鸞聖人の教では、絶対他力の教といふのは、親鸞聖人の念仏の教でありまして、それは横超。横といふのは他力の意味、よこざまにといふのは他力の意味でありまして、それから超、一足とびに向ふから、これが仏のお慈悲、仏のひかりが私にとほつて来るのでありますからして、こちらが何とかして登つて行つたといふのぢやなくして、こちらは落ちこんでゐる、ドン底までおちこんでゐるこちらに、底の底まで徹つて来る光にふれた、それだからして横超、超といふのはその心持であります。

何か超絶界から、超絶界が超絶界ですんでゐるのなら、私共と交渉がありませんけれど、その超絶界からただ超絶してゐるといふのでなくして、それは私の、この煩悩のいのちに徹つて来る、まことの生命といふものが私の生命に徹つて来る、そこにお念仏申すといふその道がひらけて来る。

それが親鸞聖人の仰言る横超、即ち絶対他力の信仰の道でありまして、ここのお経の言葉で言へば『横に五悪趣を截り』でありますから、よこざまに、横ざまにといふのは仏陀の大願力によつて、五悪趣でありますからして、地獄・餓鬼・畜生などの五つの悪い世界を截ち切り、そして『悪趣自然に閉づ』でありますからして、その悪い世界が自然と閉ざされてくる。閉ざされてくるといふのは、その悪い世界が自然と転じて来るのでありませう。今迄悪い世界があつたと思つたのが、あれがどうかなつて行く、その有様が味へる、といふやうなことで、これも矢つ張り、自然に閉づでありますからして、俺に地獄の心がおこつた、餓鬼の心がおこつた、こいつはいけないといふやうなことで押へつけようとしたのであれば、これは駄目であります。

私もしばしばさういふ失敗をして居ります。自分もよつぽど偉いつもりで、かういふえらい誘惑の心がおこつた。しつかりおさへつけて誘惑に打ちかつたぞと思ふ時には駄目でありました。打ち勝つたぞと思ふときにもうドン底におちて居ります。大低さうであります。

それはあらゆる欲についてさうであります。食ひたい食ひたいといふやうなことは、第一の欲でありますが『武士の子は腹がへつてもひもじうない』といふやうな調子でもつて我慢してゐると、それぢやほんたうにつづかんのであります。矢つ張り食ふものもない、あの戦争の末期、昭和二十年前後、戦争後もさうでありましたが、ああいふ中にあつて、私共その時は京都に居りましたが、ことに京都は食物がない。その食物がない、食いたい欲に自分は打ち勝つたぞといふのではどうも駄目なのでありまして、もう食ふものも何もない、たまには京都で河べりに行つて、雑草、くさを採んで来て食べたことなんかもありますが、あれで、我慢してゐるんだといふやうなことはやりきれんのであります。矢つ張り食ふものもいよ〳〵なくなつて、憐れな有様におちてゐる、その自分といふものが、どこ〴〵までも仏のまことによつて見徹されてゐるといふ、お念仏のうちに食いたいといふ欲がやむんぢやありませんけれど、それがやわらげられて参りますのであります。それがお念仏申して食ひたいのをやわらげる、それぢやないのであります。それぢや駄目になるのであります。

食ひたくて〳〵たまらぬ。がういふ風なドン底にまでおちて来て居る。かういふ境界にまでドン底にまでおちて来てゐる自分といふものを、何処までも見捨てたまはぬ仏のまことといふものが自分に通うて来て下さると、自然にそこに念仏称名する時、そこに何となく和いで来る、食ひたいといふ欲に打ち勝つたといふ勝利の声ぢやないので、自分は負け〳〵てドン底まできてゐる、そこに無限の憐みといふものを自分に注がれてあるといふところで、自分の心持がやわらげられて来る、斯ういふことになるのであります。で『悪趣自然に閉づ』と。悪い世界、地獄、餓鬼、畜生といふやうな悪い世界が〝コイツ〟と押へつけるのでなくて、無理のないうちにどうなつたのか閉ざされて来るといふのは、自然に和げられて行つたとなるのでありませう。

ところがどうでありませう。この私共の欲といふものは限りのないものであると。でここに『道に昇ること窮極なし』と。これをこの逆の方から味つて参りますといふと、私共の欲が限りないといふことになるのであります。

でその『道にのぼること窮極なし』といふそのことを表面から申しますと、その仏のまことの道にどこまでも〳〵極りなく昇つて行くと、かういふことなのでありますが、そこを私共は自分の生活の上からどう味ふかと申しますといふと、これは矢つ張り、この煩悩無尽誓願断といふ言葉もありますやうに、私共の煩悩がもうつくることがない、実際さうなのでありまして、それぢやこの終戦前后には、そういふひどい目に遭うたが、今日になつては、食糧なんかも相当に豊かにあるやうになつた。ことに今年は豊年らしいといふやうなことで、大いに我々は食糧が豊かになるらしいといふ有様でありますが、それぢやさうなつたら我々の欲といふものはそこに満足されて、それで私共がそこに落着くのであるかといふと、さうでありませんでせう。

実際この非常に困つた時にはサツマ芋をいただくといふことが非常に有難い。お菓子も何もない時で、サツマ芋をこんなにおいしいものはないと思つて頂いて居りましたものが、今頃になりますと、サツマ芋は悪いことはないのであるけれども、そんなにおいしくないといふことになつて来る。そして、もすこしこのおいしいものがあると云ふやうな調子になるのでありまして、段々自分の欲が満たされてくると、その上に〳〵といふ風にまた欲が増長してくる。さうすると私共の問題といふものは、一度仏のお慈悲に触れたら、それで萬事解決して了つたとは云へないのでありまして、次から次へと欲が増長して行く。その自分の姿といふものに、もう一度立ちかへつて見なければならぬといふ問題になりますし。それから、それと関連して私共の生活上の実際問題が種々あります。私共は、この実際問題、実際問題といひましても、苦しい問題にブッツかつて来ると、目が醒めて来るのでありまして、私なんか、近角先生のお育てをうけました。始めの程は近角先生の『信仰之餘瀝』といふ御本を熱心に読んだものでありますが、あの御本の中にあつたと記憶いたしますが、我々が何かこの苦しい問題に出遭うて、そこに新しく仏の御慈悲に気がついて、お慈悲が今更の様に感ぜられて来るいふと、そこでひと落着きする。これでもう解決したといふ気になつて腰をおろす気になる、けれども、腰を下して了つてそれで終りかといふと、さうはいかぬ。また今度はもうすこし深刻な実際問題がおこつて来ると、さうすると自分は今迄信仰で落着いてゐたと思つたが、これは駄目だといふことになり、またそこに心の苦しみといふものを一つとほる、となつて、矢張りお慈悲、お念仏にかへつて来る、とまた、そこでまたひとつ抜けて来る。

ところがそこでとまつて了ふのではない。何かその次には人生の実際問題がひかへてゐる。次から次へと実際問題がおこつてくるものであるから、実は我々の信仰問題といふものは、次から次へと実際問題にブッツかつて、そこに深められて行くものであるといふやうな意味のことを先生があの中でお述べになつて居りますのでありますが、それをお読みした頃は、私まだ三十歳にならぬ若い頃でありました。けれどそれからのちの三十年から四十年ばかりの自分の歩んでまゐりましたあとを振りかへつて見ますと、実際さうなのであります。

実際問題と申しますと、自分の子を失ふ、子供が死ぬる、親が死ぬる、兄弟が死ぬるとか、大事な友達が死ぬるといふことも実際問題でありますし、それから何かにつま

づくといふやうな実際問題もある。或はこの非常に親しい間柄であつたのが、何かのことですつかり別れ〳〵になつて了ふといふやうなことがある。実際この徒然草、兼好法師が書いてゐたやうでありますが「風も吹きあへずうつろふ」風も吹かないのに移り変つて行く、人の心が花のやうに親しく馴れて居つたその時のことを考へると夢のやうである、何時の間にかこの心がはなればなれになつて了うたといふやうなことを兼好法師が書いてをるのでありますが、実際あそこを読みますと、自分の生活の上に、あそこはしば〳〵繰り返されてをりますから、さういふ心が、何と云ひますか、遭うてゐたかと思ふとまた離れて行く、それは相手に死なれるより、もすこし淋しいことである。実際さうでありまして、自分の親を失ひ、子を失つたことも淋しい、悲しいことでありますけれど、生きながら心が別れ別れになつて行く。それはまた非常に淋しいことである。

さうした問題が次から次へと種々の機縁で起つて参りますのであります。さうすると矢張り人生と云ふものは決して自分の思ふ通りになるものではないと、この人とはずつと親しくして行きたいと思つて居た人と、とんでもないところから離れ〳〵になつてくるといふことも始終おこつて来るやうなことでありまして、こんなことを数へたてて参りますと、実際私共の生活といふものは、現実のいたましい問題に満ち〳〵てゐます。

さういふ人生問題にブッツかればブッツかる程、そこにお念仏の味はいといふものは出て来る。実際行きつまつて、どうともならんといふ時に、自然と浮んで来るお念仏であります。淋しいからお念仏を申して心をおさへつけようと、それなれば他力の中の自分といふものになります。さうでなくて親鸞聖人の教といふものは、淋しさなら淋しさのドン底までに行つて居ります私に、向ふからお慈悲の力、智慧の力がかようて、自分もさう思はぬうちにお念仏が自然と申されて来て、淋しい心のドン底が、何となく和らげられて行く、とかされて行くといふのが念仏の味はひである。

さうであるから一方から云へば、これは非常に消極的ではないか。もうすこし積極的で、チットお念仏といふもので人生がうまくゆかぬかと言ふ人があるかも知れません。然し念仏といふものはさうでありません。

私共がドン底までおちて来る、そこにお念仏が徹つて来る、そして念仏称名はおのづからこの口に浮ぶものであつて、自分が何かつとめて称へるといふやうなものではない。その味はひの中にこの『道に昇るに窮極なし』といふお言葉が味はへてくるのであります。つまり何処々々までも自分がおちればおちる程、向ふのひかりといつたものがこの身にとほつてくる。そこのところを『道に昇るに窮極なし』自分が自分の力で昇つて行くのぢやありません。

然しながら、高き光が自分に徹つて来る、どこ〳〵までも徹つてくるのではありまして、そして今の人生問題の苦しみに出遭へば出遭ふほど、益々深く自分に徹つて来る。で、ここのこのお言葉をさういふところから私共は味はゝせられるのであります。

さうでありますから、消極のドン底まで行つて、そこから積極といふものが湧いて来る。退くだけ退いて、ぎりぎりのところまで退いたところから、それから、一歩踏み出して来る。さういふ力が湧いて来るといふやうなものでありまして、そこは自分の力でその力を出して来たといふのぢやありませんが、自然とそこから消極のドン底から大積極の力といふものが湧いて来る。その大積極といふものは、我が力でなく、ひとへに仏力である。といふことになるのでありまして、その味はひが窮極なしと、どこまでも〳〵人生問題の続く限りお慈悲の問題、お念仏の味はひといふものも続いて行くとなるのであります。

耳と眼（一）

榊原徳草

明治の文豪夏目漱石は例へば山脈のやうな偉大なる文豪といはれ、その門下に幾多の秀才を輩出してゐるが、その中で師漱石も認めた「吾輩は猫である」中の寒月君に擬せられた寺田寅彦の随筆は有名であるときく。私は最近その一部を読んで心に甞つた言葉がある。それは「眼は閉ぢることができるが、耳は閉ぢることができない。なぜか」といふ一句であつた。非常に面白く、なぜかと開き直つて詰問されてゐながら吾意を得たりといふ感じがした。眼は閉ぢることができる、耳はそれができない、なぜか、などという問ひは、只の問ひではない。もし普通に真顔になつてそんな問を仕掛ける者があるとすれば変なひとである。愚にもつかぬことをきく馬鹿な男である。寅彦の問ふところの「眼は閉ぢる耳は閉ぢない」といふ疑問は生理学的でも進化論的でもなく、眼と耳によつて具体化されたところ

の聞と見との意味であらう。根元的な意義であるといふことであらう、そんな所が問はれる者に皮接して迫つてくる力が感ぜられてくる。問ひに直接性があつて力が感ぜられ重量感がある所以である。もしこれが見ることと聞くことの根元的な意味はどうか、など〻問はれたなら、心理学か何かの試験問題を課せられたやうである。生々しい現実感はこない。所が眼は閉ぢない如何、とくると、禅問答にも似た逼迫感があり緊張した一本勝負のぬきさしならぬ問ひになる。このやうな問ひかけを耳と眼とに於いて問ひかける寺田寅彦は、これは彼が我々に問ふだけでなく寺田寅彦自身も自ら発した所の問ひに問はれてゐる。即ち自他一般に問ふところの問ひであり、誰も彼れも考へさゝれ釘を打たれるところの人生問題の深い問ひなのであると思ふ。

寺田寅彦といふ方は——話は一寸外れるが夏目漱石門下の他の偉才俊秀とは一風変つたお弟子であると思ふ。大抵烏の子は烏で文豪の弟子は文人墨客が多いが彼は物理学者である。而して所謂名士余技的に傍ら文筆を呵して稿を草する従来の人々と違ひ、物理学といふ一応文家の世界とは縁の遠い所にそのまゝ自己を探求して物理学者の寅彦が即文豪になつてゐる。こゝが出色と謂はれる所と聞く。世に新しく顕れてきて或る意味では師漱石より一歩進んだとも云へる文豪であるとも聞く。この人のこの問ひである。まことに重量感、緊迫感が他と異つて体当りしてくるわけだと思ふ。

耳は開いたまゝである。眼は開閉自在である。なぜか、これは事実に即した端的な問ひである。そのものの露呈であり難問難詰である。以下愚見であるが、自分はこの詰問に遭つてフト時間と空間とを思つた。智慧と慈悲とを憶念した、禅と浄とをみた、ある意味では如来と衆生を、私と阿弥陀を思ひ浮べて有難かつた。

眼光紙脊に徹するといふ語がある。これは眼には宿命的な障りがあるが、それを貫通してものの真実、ものの生命に触れたことをいふのであらう。こゝで眼はその作用として障碍をもつてゐる、眼の作用「みること」はどうも障りをもつことになる。

吾々の見る世界は感覚界であるがそこには空間的に限られた広さがあり、室の中にゐて向ふをみれば、もう障子の彼方は見ることはできない。庭前の景色は築山に障碍される、春の野の広さも霞のためにさへぎられて向ふはみえない。

見える感覚界もさることながら、見ることによる知の世界も自ら限界が存する。引いては論理の世界、思索の世

界、凡べて知るといふことには一定の限度があつて知は空間的な性質といふ運命をもつてゐる。知るといふことには広さはあるが深さがついてこない。これには時間が要求される、時間的な面は耳の世界、聞く世界である。例へば障子のあちらの鼠の嚙る音を聞くことができる。近江八景を詠じた句「八景は霞に消えて三井の鐘」である。視野は閉ざされても、鐘の音は聞こえてくる、それで又八景もみえてくるともいへる。それであるから、まあ耳は時間としておく、眼は空間としておく、別の言葉でいへば眼は限界があり耳は永遠に通ずる。

時間と空間とを一個の人間の生活のうちで考へて見ると、初声あげて生れ、老ひ、死するは過去・現在・未来の時間的連続の方面であるが、匍つた幼な児が立つやうになり少年青年壮年に至ると、その人の生活は母の膝から社会へとつながり、いよ〳〵複雑を極めた横の世界が拡がつてくる。耳は因果の世界であり眼は縁の世界である。因と縁によつて果を生ずる生涯は一口に因縁といふ。これは眼と耳の一つになつた世界とも云へる。

またこんなことを思ふ。吾々人間は時間と空間とで生きてゐる。そして人生行路の私の毎日の世界は、恰度、死屍を背負つてその死児の齢を数へながら、未だ生れぬ子供の齢を数へてゐるやうなものであると。吾々の記憶とか考へとかは知ることによつて成るが、過去はすぎ去つてしまつてもう死んだ世界である。その死んだ世界の記憶を材料としたり知識判断したりして即ち死知を背負つて、未だ来らざる明日、未来の夢の実現を希求してゐる。思考の素手が過去の死屍だから、そこからどうして生きた未来が生れようか。しかも我れは現在に生きてゐる、過去にも未来にも生きることはできない。若し真実に生きるなら現在、永遠の現在に生きることである。だが事実の現在は実は過去の屍と未来の夢でしかない仮りの現在である。真実の現在には一寸も生きてゐない。こゝに、そんな状態でありながら生きざるを得ない自分といふ不可解な奴の苦悶と矛盾とがある。

時間の世界も、考へられたら、もう計らひの中に投げこまれてしまふ。この苦悶と矛盾とにつき当るとき、ほんたうの真実現在が催してくる。一瞬にして空間化してしまふ。知によつてどんなに精巧を極めて考へてみても、時間は私の時間でなくなつてしまひ、時間といふ観念になつてしまふ。つまり計らひの思考に還元してしまふ。聞く世界は時間だと云つても「聞くこと」と「聞く」とは全然違つてくる。面前の生菜と画ける野菜である。過・現・未の三世が離れられぬ、計らひが瞬時も止まぬのが実は生きてゐることなのである。しかも生きてゐることは死んでゐることとなる。その死も大死一番の死でなく若存若亡の死で何れとも決着のつかぬ浮世の生である。万事当てにならぬが

理の当然であり、愚痴に沈み、先きが不安で暗いのも道理であるが、悲しい哉それが私達現在の真実相である。

以上のやうに、聞くこともその真実性を失つて見ることに還元されてしまへば、知の世界、計らひの世界は魔物である。時間も空間化してしまふ。聞くことも見る中へ入れてしまふ。何でもかでも魔法のやうに苦悶と暗黒に忽然として化してしまふ。

では、まことの時間とは、まことの聞くとは何であるか。真実の時間とは絶対の刹那の現在である。白馬隙を過ぐるその瞬間ともいへる絶対の現在である。絶対の現在は永遠の刹那といつても同じである。何れにしても相対五分五分の計らひづくめで生きてゐる吾々には、この絶対の現在も永遠の刹那も手に入りちうな筈はない、猫に小判である。吾々の一生は酔生夢死の一生涯といふ、夢を追ひ夢を喰ひ屍児を負うて旅する吾等生涯の旅姿は依態のしれぬ姿であるが、それがさうと判らない。

一夜の降雪に白皚々山も森も庭も白一色になるやうに、この私の世界、穢悪汚染の身と土といのちとの上に、不可思議を通じて聞く世界が大音響流尽十方と鳴りひゞく。その声を聞くこと、そのために耳は常恒に開いてゐるのではないか。絶対に閉ぢないやうに開いてゐるのではないのか。

閉ぢることのできる開閉自在の眼の特性を活かせて、煩悩を煩悩と知り、火宅無常を知らせてくれるのも耳の方から聞く一つにつゞまつてくる。その意味で、眼は凡てを空間化する碍りもあるが、それを転じて耳に向けて行くこともできる。思ふに耳が先にできてその効用を増長さすがために、あとから眼がつけられ思考の仂きが植えつけられたのではあるまいか。人間にのみ「耳」の世界が真実をきくためについてゐる、猫にも犬にも耳は有るが、それは眼と同じ位の役目である。彼等の耳目は一口に云へば眼だけの動物である。人間はそれを基にするのでなくて耳をもとにするのである。発達過程から云へは、あれは駄目だから耳ー聞くことが与えられたのである、聞くことが実は見ることとなり、聞見一道となり、そらごとをそらごとと、まことにみるとき、たゞ念仏のみまことの世界が誕生してくる。仏の世界の聞と見とは吾等と真反対である。仏の時間と空間は又格別である。寿命無量と光明無量とが顕れてくる。光寿二無量とは相対五分々々の凡夫の聞（耳）や見（眼）とは真反対の世界に現れてくる時間空間である。五分々々相対でない一つの中に現れる二つの相である。その一つが概念や知識の所謂哲学的思索の中に埋もれて窒息してゐる一なるものでなく、一者でなく、南無阿弥陀仏なる人格仏

である。その光・寿二無量の人格が計らひの中に浮沈する「生」しか持たない迷妄の凡夫なる私に「南無阿弥陀仏」と顕れて一になりに来たるところ、これ大悲の南無による仂きである。だから南無阿弥陀仏は阿弥陀仏が私を救つて仏となつた姿、吾等が往生を成就した姿である。吾等衆生の往生を完成した體である。南無阿弥陀仏の體即ち名号が仏事をなすところには光・寿二無量の仂きがあり、よろこびます姿がある。「称名は憶念、憶念は念仏」「即ち南無阿弥陀仏」といふ喜びます阿弥陀如来様が実在するのが凡夫の救済の姿である。この救済の味を、聖人は

然れば、大悲の願船に乗じて光明の広海に浮びぬれば、至徳の風静にして衆禍の波転ず。

と讃仰されて、聖人の生命の響となりて現れてくるのである。

未完。

奄美群島の開教

長峯崇仁

……かへりみるに、不徳菲才の身、恩命を被つて奄美群島に駐し、一方ならず人々のお世話になつて、ここに二年と六ヶ月の星霜を経ました。

牛の乳の中に獅子の乳を一滴そそげば、見る間に牛の乳は透明な清水になると経典には語られてあるが、獅子ならぬ身の如何にせん。この長日月、身命を投じて。徳之島五万の兄弟姉妹の心の安らひの座がひらかれない。誠に饑死するも尚ほみたされぬおもひである。

渡島にあたつて、この島々は祖聖にいただいた「国土建設実験区」だと肝にきざんで、今も日夜にこのことを忘れてゐない。或は絶壁にいどみ、或は怒濤とたたかひ、疲れはてては、「今やはやわが力尽きぬ」と思ふことも幾度あつたか知れぬ。その度に、不思議にもこの身は水の力に浮んでゐた。勿体なや祖師は紙衣の九十年。「我が為す」と

思ふことすべて、為さしめ給ふ念力の潮にうかび、力味の夢は破れた。

おもへば、奄美の精神界は、お育ての手厚い、仏縁の深い内地の者には容易に推測し難い程の不遇な宿世の因縁に障へられてゐる。或る人は運命の島と呼ぶ程に、自然の地理、気候も酷烈な苦難の島でもある。しかし自然的条件のみならば、北の人達には望んでも得難いよいこともある。米は二度出来る。唐芋は年中通じて出来る、冬と雖も北の国の如く防寒の費もなくてすむ。自然は南北一長一短で、南の離島は悪いと一概には云へぬ。けれども、何と云つても痛ましい限りの事実がある。それは精神の窮乏の歴史である。精神の窮乏、虚弱の程度、容態を確実に測知するためにのみ、二年六ケ月が費されたと申しても過言でない。

その由来する所は決して一つや二つではあるまいが、概して離島の政治史にあり、文教政策にあることは承知のことである。中でも想像以上の禍根は薩摩藩の政権にあつた排仏的傾向である。

一言にして云へば、この窮乏は精神の権力に対する屈服にある。生存の為にも、立身出世の為にも、地方覇権への追随と芋蔓式な血縁に全く依存せざるを得ない地域社会を固めてしまつた。その証拠は「他所ものは育たぬ」といふ。全く覇権と血縁に封鎖されて、個人の精神的な明の許されぬ島を造つてしまつた。それを造るために、先聖の御教化を断種した。その最大の史実が廃仏棄釈の文教破壊であつた。

唯今の問題として最大の要件を明らかにせねばならぬ。外ではない、真実を求める心、道を求める心を蘇生せしめねばならない。生存保全と立身出世の意欲とその手段は、何処の人達よりも強い。所謂活力は内地の何処の人達にも勝るとも劣らぬ底力を持つてゐる。そのままが奄美の人々の肉体なのだ。その肉体のバックボーンが、ここで、真実を求め、道を求め、法を聞くことの為に生れた、といふことになつたら、まさに驚天動地のつぐないの大事業ではあるまいか。

生活が楽になる為にと努力する心根は実に強い。身のまはりを改造する努力はたくましい。唯いたましいことは自らの心根に注意するゆとりがない。現に吾が身の煩悩熾盛を感じ道を求める心が盲角になつてゐる。この証拠は祭祀の慣習は墓参りだけである。祖先の恩を大切にすることは尊いが、祖先以外は拝まないところに問題がある。罪業と煩悩を知らないから、蓮の花の意味が解らない。重大事である。教を失つてから唯現世的な吉凶禍福ばかりが問題となり、環境のみをさばく生活にすさんで行く。

二年六ケ月。生活は支へられ乍らも開教の実績はあがらず、道を求める脚が動かなかつた。接木に例へるなら、時期をはづれてゐたかも知れない。台木の切り所も、接穂の切り方も拙劣であつたかもしれない。

幸にして、今、三度目の霜月の報恩講をお迎へする頃になつて、五、六本の接木が新芽を吹き出した。よく見ればそこにもここにも新芽を吹き出しさうな接穂の色が眼に泌む。「まさに知るべし、仏願むなしからざるが故に」との聖言ゆるぎなきを覚えて、「如何ばかりお手間かけしや菊の花」の感涙にむせぶのであります。

今ひそかに願ふことは、法衣を纒い、仏祖先聖の教恩を伝へ、心のいたづきに手を添へる伝道者の恒久的にこの島島に駐在し、求道の伴路となり、且つ求道の場のこの島々に一つづつでも建立されることである。

御縁あつて、後半生を托した奄美の精神界に、求道の座として、唯一つでも道場が出現するならば何時死んでも案ずることはない。そのために全身全霊を打ちこんで見たいと思ふ。

願はくば、島の御同朋と共に、内地の御同行方の御念力に支へられて、一日もはやく、親鸞聖人が、永遠にこのいたましい島を見守り給ふ恒久施設の成就を願つてやまぬ。

島に確乎たる寺が建てば、その昔、仏縁をこぼち、仏縁を絶つた人々も、その難に殉じた人々も共に手を執つて喜び笑ふ日が来る。……』

（註記）　聚墨生

尼崎市の今北診療所の城一雄医師と不思議な御縁から四年前から信交を続けて居ります。ところが城さんは奄美島出身の方で、現在二十万の人口を持つ奄美の島々に、カトリック教があるばかりで、仏教が殆んど無縁の状態であることを非常に悲しんで居られ、正しい仏教がこれ等の島々に普及され、み仏の慈光の麗らかに輝く日を、切なる念願として居られることを知りました。

本年初めに、長峯師発行の「精神奄美」を城さんから送つて貰ひ、それに城さんの書信が添へてありました。

『昨年末、長峯師に面会。眼光、皮骨、顔貌、深い皺。まことに内地のお坊さん達にくらべて一種の凄まじさを感受しました。それだけに現地の御布教に難渋して居られることを知り、仏恩の広大さを感じました』

と誌してありました。こゝに長峯師の百難を越えてひたすら精進される御苦労を知り、皆様に御紹介申して、その労をすこしでもねぎらひたいと思ひ立ちました。

編集後記

氷海に閉ざされた南極探検の『宗谷』が、オビ号に救出せられて、海鷹丸と共に悠々帰航についたとの報告は、三月号の編集記をものしてゐる私の耳に報道せられて来る。

ここ旬日、宗谷号を中心に無電がどんなに縦横に飛び、救援の手はあちこちに準備せられたことと思ふにつけ、罪業の氷原に堅く塞ぢこめられてゐる身に、如来救済の御苦労を偲び、一入念仏の催しをうけたことでありました。

○

桃の節句もすぎ彼岸の期も近づきました。私はお蔭様で健康を段々恢復し、本月は例年にない出張を続けて居ります。十日には愛媛大学の松本解雄さんを迎へ、日曜講話を御依頼申し、種々啓蒙を頂きました。

○

△福島先生の御近況は、非常に御多忙で、教育学の御著述も仲々進捗されませぬ由であります。何よりも御健勝をおよろこび申上げます。

△榊原さんの「耳と目」の原稿は、禅と念仏、と註釈を題に加へたらと思ひましたが、概念化するのをおそれてそのままにいたしました。次回に続きます。

△「同座の聖人」は福本ざんが池山先生の御遺墨をお伴して下さつたので、毎日掲げて居ります私の胸に繰り返されて来る、無限の感銘であります。なほ次から次へと教へられ、導びかれることでありませう。

△「奄美群島の開教」は、城さんの心願と長峯師の精進を聞いてそのまゝにするに忍びず、御紹介いたしました。御賢察を乞ふ次第であります。

――○――

この三月号で、満八ケ年の慈光誌を発送出来ました。もとより私は人様に法を説くといふ柄ではありません。唯、盲、唖、蹇の私故に、人一倍深く厚い御念力をいただいてゐることを仰ぎ、且は、かかるあさましき身が、一日々々を念仏一に生かされてゐる事実をつたない筆で御報告申し、私如き盲者、唖者、蹇者あれば、この大悲大願を共に仰ぎ、浄土への結縁を頂きたいものと念願して参りました。

『阿闍世のために涅槃に入らず』とは、耆婆大臣に勧められて、仏辺に進まうとする阿闍世王を照覧遊されての、大聖釈尊の大悲の声でありました。

このこころを阿闍世とのたまひて見捨てじといふみ慈悲なりしかとの常音先生の御歌もしきりに想ひ浮びます。

御案内

第一、二、三日曜午后一時半、一道会館日曜講話。

第一日曜、午后六時半、中区葵町法善寺、輪読会

十三日午前午后、熱田区幡野町願入寺法話会

廿四日午前午后、昭和区小桜町教西寺法話会

慈光 第九巻第二号 昭和三十二年三月十五日発行（毎月一回十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可

定価 一部 十七円（送共）
半年 百円（送共）
一年 二百円（送共）

名古屋市南区駅上町二ノ二八
編集・発行人 花田正夫
名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷人 奥川正生
名古屋市南区駅上町二ノ二八
発行所 慈光社
振替口座名古屋一〇四七〇番